詩集　タシリ TASSILI

著者　よしかわつねこ
発行者　小田久郎
発行所　株式会社思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三―十五
電話（二六七）八一四一（編集）八一五三（営業）　振替東京八―八一二一
印刷所　相良整版・福田印刷
製本所　岩佐製本
発行日　一九八四年一月八日
定価　二二〇〇円

TASSILI

よしかわつねこ

思潮社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

タシリ TASSILI

よしかわつねこ

目次

I

氷山について　12
壺の中で　17
骨と夕陽　21
花の季節　28
ぎんなん地蔵――　30
川の中まで　35
はらはら散って　39
たこの背の　43
笛について　46
海が沈む　48
どうして景色は　56
ひらめの刺身に血が流れない　59

II

れいこんが降って来る夜　64
ガラスの国　66
木魚の部屋　68
しんしんと　71
焼かれてしまった魂は　74
わたしの部屋はがらんどう　78
仏教でなく　80
とおいあなたに　83

III

巽為風（そんいふう）　88
ふくらむ　91
目　94

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

面について　99
祭まで　103
鍵暮し――スキクダにて――　106
紙飛行機　108
消える会議　110
チュニスのきりぎりす　112
皮膚への旅立ち　114
水銀の反乱　116
巻き得るか　ねじ　118
あとがき　120

装幀――美鷹同太

I

氷山について

迫まられる　すべて　よみがえるよう　こまごまとした点景が　浮かんでくるのは墓標　が並んでいる　墓まんじゅうの上　新しく立てられて腐っていった　その日集った生者たち　本堂で　緋の衣に祈りをこめた　あれはまさに　生き残った者の　自慰の立て札　もしかしたらこのひとを殺したのは　わたしではなかったかと　誰しもひそかに思っているのだ　だから白木の墓標を立てる　二対の竹の花立てに　沈丁華やしきび　あの強い金色の香りの花を飾り立てる　墓地はいつでもお祭りである　すでにして行ってしまった者たちを　呼び返す生者の祭典　を待っているもう一つの身体が　迎えに来ようとする霊媒に攻められている　迫まられている　これは何という　終熄であろうか　なんという無慈悲

であろうか　カレンダーを繰らねばならない　一つの関係が無かったように抹消されてゆく　歯が立たない　亡霊から迫まられている　のは取り巻いている顔たち　やさしい関係を持ち得なかった　冷たいいつわりの生者たちの　涙の流れない葬祭であろうか　とっくにかわいていた愛情であろうか　そこに迫まってくる　熱いものは何であろう　狂おしく噴き出るものは何であろう　その顔を　せめてやさしく貼りつけたいと願いながら　涙するのは何者であろう　ついに打ち立てられなかった愛の釣橋が　限られた時間のうちに切られてしまう　うつくしい氷山であったが　いま　溶けようとしている　それはそれで固く結ばれていた氷山は見られるだけでもよかったのだ　眺められているままに　氷山はついに何にも語らないで　熱くなってはいけないのかもしれない　たったひとつのわたしの氷山が　溶けようとするとき　音のない言葉で迫まってくる　氷山よ　あの果てしのない海に　なってはいけない　誰ともわからぬひとに　なってはいけない

〈氷山についての反歌〉

あれは嘘　だったのだろうか　あれは夢だったのだろうか　あれは霊なのだろうか　あれは亡霊ではないのだろうか　あれはさわってもてしまわないものだろうか　あれはさわれば胸のあつく　なるものだろうか　あれはやはり　苦しみに違いないものだろうか　あれは確かに胸の動悸にちがいないだろうか　あれはただの　聴心器であったのだろうか　あれは波の　うねりだったのであろうか　あれは寒さに　震えていたためであろうか　あれは暖められたのだろうか　あれは嘘で　あったのだろうか　嘘では　なかったのだろうか　あれは確かにまだ　生きているのであろうか　語る唇　支える手　胸の動悸　ひどい悪寒　波のうねり　噴き出す苦汁　あ・れ・は・ま・だ・・・・・・いないのだろうか。

＜反歌は讃歌でなければならない＞

怒濤のように　あのひとは叫びかける　十三時間の労働に　考える力も
失せた　真夜中　脳髄が砕けるようだ　あるいは朝の　目覚のめ瞬間に
滝のように降り注ぐ光のプリズム　瞳の奥でごうごうと鳴りひびく音
あれは何の光　何の音　あかつきと夜のあわいに迫まってくる　ふたつ
のものをつなぎわたす　わたしの全身を捕え乗り越え　呪咀のように
真空地帯にとどろいてゆく　わたしの魂に血へどを吐かせ　天に向かっ
て昇って行くのだ　おまえ　生きたくないと言うのを止めよ　おまえ
生きぬかねばならないと　言うのを止めよ　おまえ　書きたいと言うの
を止めよ　おまえ　嘘をやめよ　祝福もやめよ　やめよ　やよ　そこに
地球の引力が止まる　おまえ自身が捨てられる　棄てよ　すてよ　おお
それがとどろく響音の　人柱の声であったか　会ったろうか　圧迫し
征服し　通り過ぎて行った影は　あれは　神の怒りであったろうか　重

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com